

TOKOROZAWA:
ARTS FOR
OUR FUTURE

とくろざわ
アートのミライ

TOKOROZAWA: ARTS FOR OUR FUTURE

「ところざわ アートのミライ」

主催者あいさつ

この度は、「ところざわ アートのミライ」展にお越しいただき誠にありがとうございます。
ございます。

本展は、今後の活躍が期待される所沢ゆかりの若手アーティスト8組11名
による展覧会です。

所沢市は1950年の市制施行以来、一貫して魅力ある文化都市の形成
を目指してきたまちです。本展は、市の主催事業として文化芸術のさらなる
振興を目的に、さまざまな世代の人々がアートに触れることで日々の暮らし
を豊かに、また未来に向けた新しい文化を育む場となるよう企画されました。

駅舎と一体となったコミュニティ型商業施設グランエミオ所沢、多くの人々
が日々行き交う所沢駅、市民の文化芸術活動の拠点である所沢駅東口市
民ギャラリーという3会場での新しい表現との出会いは、所沢の未来を鑑
賞者それぞれが思い描く特別な体験となることでしょう。

結びに、本展を開催するにあたり、作品展示にご協力くださいましたアー
ティストの方々を始め、多大なご尽力をいただいた関係者の皆様に厚く御
礼を申し上げます。

2023年1月14日
所沢市長 藤本正人



西武鉄道 所沢駅

小穴琴恵《私の風景》
OANA Kotoe My Landscape
2022年



グランエミオ所沢2Fセントラルプライベートスペース



所沢駅東口市民ギャラリー



1 大きなテーブル
A Large Table
2022年

3 ファストフードのある食卓
A Table with a Fast Food
2022年

5 菩提樹のある室内
In the room with a Bo Tree
2022年

7 チリマツ
Chilean Pine
2022年

2 シャワールームの風景
A View in a Shower Room
2022年

4 たたずむ人
A Standing Man
2023年

6 帽子の置かれたダイニングテーブル
Dining Table with a Hat
2022年

8 私の風景
My Landscape
2022年

小穴琴恵は、日常の光景や身の回りにある物を描いてきました。描くものを選ぶときに、作家が一番大事にしていることが、日々の何気ない景色が、ほんの一瞬だけ特別に感じるその瞬間を見逃さないことだといいます。描くという、身体記憶を呼びます行為を通して、日常が絵画になること。それこそが、小穴の作品の魅力となっています。

《ファストフードのある食卓》もまた、そのような特別な瞬間が始まりとなった作品です。時に自分自身の存在を消

し、絵画が行きたい方向を探りながら完成した本作は、見る人に何かを強いることなく、描かれているものを想像する楽しさにあふれています。

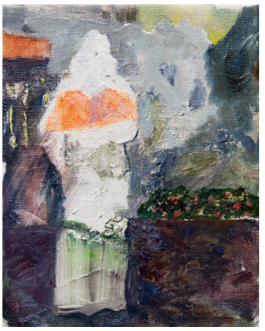
《大きなテーブル》は、ピッチャーや箸などが置かれた食卓が描かれています。日頃、目にする自宅の食卓と、作家の旅先での記憶に残る、いつもと異なる食卓。ここでは実際に見たいいくつかの風景が、画面のなかで再構成され、時間と場所が机の上で溶け合っています。



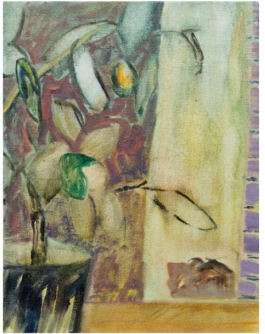
2



3



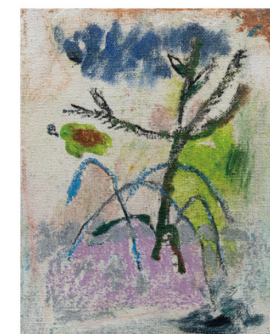
4



5



6



7



8



大野綾子は、石を主な素材に、新しい石彫の可能性を追い続けている彫刻家です。これまでも作家は、日常生活や風景などから着想を得て、人やカマキリなどの昆虫、流れる水や動き続ける魚、また会話から生まれる言葉や食事、眠りといった日常のなかで起こる行為をモチーフに選び、それらから受ける軽やかな動きと、重く硬い石という物質の調和を探ってきました。

所沢駅の中央改札口を出て、会場となるイベントスペースを訪れた作家が、その場所から受けた印象が出发点となった作品が、《さかなのような人(マーメイド)》です。会場の前に置かれたストリートピアノで、誰かが日々奏でる美しくも楽しい調べ。作家の手を介することで深岩石(ふかいいわいし)は、そのような音の波を泳ぐ人魚となりました。

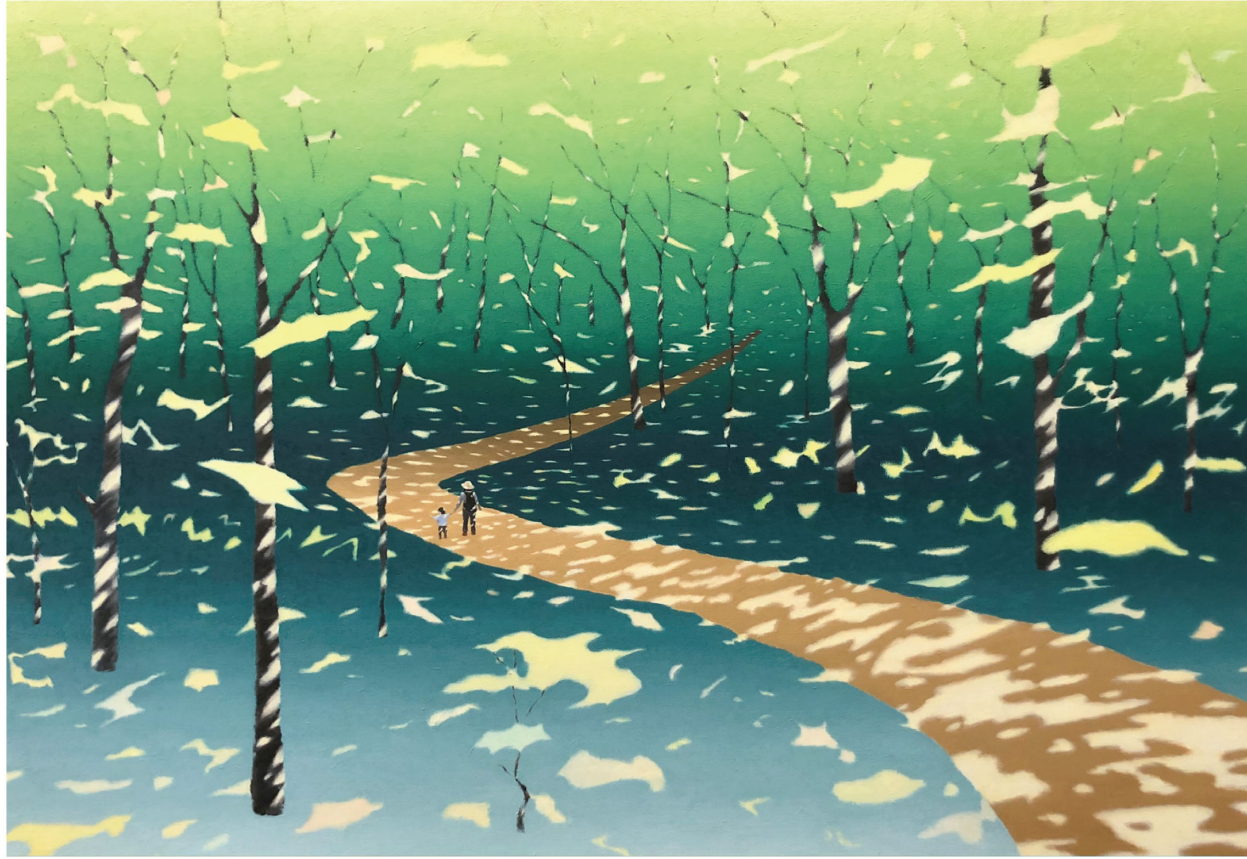
さかなのような人(マーメイド)
person like fish (mermaid)
2023年



さかなのような人(マーメイド)

ポロロろんろ ろんらんらん
ポロロろんろろんらんらん
硬く冷たい楽器から生まれるマリンな音
彼女は「海のようにだね」
大きな石を前に
この世界をそう言った
冷たい床の上で小さな足が丸まって動く
暖かい季節になったら
生ぬるいお水で泳ごうね
小さな手のひらの中の石
いつかはみーんなその石になるんだよ
目の前の見えてる世界
見えない世界
私とあなたたち
いつしか音色に合わせてみんなが踊り出す

2023年1月 大野綾子



トトロの森
Totoro's Forest
2023年

福島県双葉郡富岡町夜ノ森付近にたたずむ
Standing Near Yonomori Tomiokamachi, Futaba District, Fukushima Prefecture
2022年



加茂昂にとって、2011年に起きた東日本大震災は、表現者としてゼロに戻って考えることを迫る大きな出来事でした。生きのびること、絵を描き続けること。震災後から今でもこの2つが強く結び合う作家にとって、自然や都市、震災と自分の関係を探るために、被災地へと向かったことは、運命だったといえます。

《トトロの森》のモチーフとなったのは、所沢市民に長く愛されてきた自然豊かな場所です。被災地でボランティアも経験し、福島に通い続ける作家のまなざしは、本作では身近な自然に向けられました。描かれているのは、作家の

家族でしょうか。木漏れ日の落ちる森のなかで、手をつないで歩くなごやかな光景は、コロナ禍を経た今、改めて自然の大切さを感じさせます。

《福島県双葉郡富岡町夜ノ森付近にたたずむ》で描かれているのは、自然の風景ですが、作品名から福島の森であることがわかります。除染作業のされていない森は、福島にはまだ多くあり、入口には立入禁止の看板が立てられたままです。森の奥に進めないもどかしさからか、絵具が壁となって画面から手前にせり出した本作は、自然と人との関係を問いかけているようです。



桑名紗衣子は、ある場所や物を粘土で型取りした原型を組み合わせて編集し、主に陶による彫刻作品を発表してきました。「型取り」は伝統的な技法の一つですが、作家にとってそれは移り変わる場所や物を保存すること、さらには、そこに関わった人々の記憶をかたちに留めることとして、重要な意味をもっています。

本展で桑名は、夏の個人的な思い出と、所沢市内でかつて使用されていた施設という市の記憶を、型取りによって、それぞれブロンズと陶の抽象彫刻としました。これらの作品の置かれ方には、一見関係なく見える事物が、あるバランスのなかで同時に起こっているという「重層的な時空感覚」を示そうとする作家の意図が感じられます。

ブロンズで鑄造された抽象彫刻《Summer Part-time Job》は、桑名紗衣子が勤務する美術大学において、ある彫刻の授業の習作として制作された石膏原型からできています。抽象形態のテーマは特に設けずに、Sabbatical Companyのメンバーでもある箕輪亜希子との共同作業で、それぞれが「お手本となるような良いかたち」だと思いかたちを、交互に削り出していきました。その後、桑名本人がさらにブロンズに鑄込みなおし、造形して仕上げています。このような労働的な側面や、他者との共同作業を積極的にプロセスとして選択され採用された彫刻のあらわれ方には、美術作品が美術として成り立つプロセスについての実験や、表現についての問いかけが含まれています。

1 Summer Part-time Job
Summer Part-time Job
2022年

2 yyyy/mm/ddの散策#3
Stroll of yyyy/mm/dd #3
2022年

3 yyyy/mm/ddの散策#4
Stroll of yyyy/mm/dd #4
2022年

4 1-3 展示風景

これまで幸田千依は、全国各地のさまざまな場所に滞在し、人と場所との出会いを通じて、自然や街並みの風景を描いてきました。描かれているものは実際に作家が目にした景色をもとにしてありますが、作家が「描くという行為のなかで色と形の原理に置き換える」と語るように、鮮やかな色彩による風景画は、どこか抽象画のようにも見えてきます。

《夕暮れの行き先2》は、所沢市内のドレミの丘公園をもとに描かれた作品です。制作された2017年は、作家にとって所沢での新しい暮らしが始まった年であり、絵を描くことと日常の生活のつながりを感じるきっかけとなりました。広がる木の枝や葉は、動きを感じさせ、環境が大きく変化した当時の感情の揺れ動きが、絵画のなかにもあらわれているようです。



夕暮れの行き先2
The Destination of Dusk 2
2017年



またね。またあとでね。
See You Later
2022年

Sabbatical Company (略称:サバカン) は、杉浦藍、益永梢子、箕輪亜希子、渡辺泰子の4名の作家により、2015年に結成されました。サバカンでは、表現方法が異なる作家同士の対話を通して、これまで複数のプロジェクトが実施されてきました。結成当初から、ともに過ごすことや距離については、サバカンの重要なテーマです。今回のプロジェクトでは、西武鉄道の

路線図に使われる9色に彩られた「またね。」「またあとでね。」というメッセージが、駅構内やグランエミオ所沢の各所に、映像とポスターで上映、掲出されています。日々多くの人が行き交う場所で、別れの間際に再開を約束するこの言葉は、大切な人と居場所への想像を見る人に促します。



1 tempo (#1, #2, #3, #5, #11, #12, #19, #20, #23, #24, #28, #41, #42, #51)
tempo (#1, #2, #3, #5, #11, #12, #19, #20, #23, #24, #28, #41, #42, #51)
2022年

2 tempo (#4, #9, #10, #13, #15, #16, #21, #22, #27, #29, #30, #31, #39, #40, #52)
tempo (#4, #9, #10, #13, #15, #16, #21, #22, #27, #29, #30, #31, #39, #40, #52)
2022年



3 The reflection in the lake #1
The reflection in the lake #1
2022年

4 The sky over the hill #1
The sky over the hill #1
2022年



3



4

杵谷圭章は、作家自身がいつか見たどこかの場所のイメージを、版画の技法を駆使し、抽象的なかたちを生み出してきました。それら作品の特徴は、やはり複数の図像をつくることのできる「版」という方法にあるといえます。同じ図像が、色を変えて刷られ、隣り合って置かれることで、それらは画面の境界を超えた関係を結んでいます。

これまでも作家は、紙に刷られた画面の外側にある「余白」に関心をもっていました。最新作の「tempo (テンポ)」の組作品では、今まで以上に広い空間のなかで、数多くの図版を構成することを試みています。作品を見る人は、まさに版画のなかに入り、余白が接続する空間を行き来するのです。



strawberry short cake
strawberry short cake
2022年

raspberry tart
raspberry tart
2022年



blueberry danish
blueberry danish
2022年



strawberry cake
strawberry cake
2022年

森田可子は、ケーキなどのスイーツをまるで本物のように描き出します。アクリル絵具に、モデリングペーストなどを混ぜ、質感をクリームに近づけながら盛り上げて描くことで、絵画であるにも関わらず、それらは多くの見る人に「美味しそう」と感じさせることでしょう。

本展の会場にも、近年に描かれたスイーツの作品が並びます。見る時間帯や、その日の体調(お腹の空き具合)によって、それらはいっそう生き生きと輝き、魅力的に見えるかもしれません。森田が描くケーキには、特別なイベントのときに食べるものでありながら、食べ過ぎると罪悪感を感じるという、スイーツと私たちの複雑な関係に対する作家の想いも込められています。

作家略歴／作家コメント／作品リスト

作家略歴

凡例

- 作家略歴、作家コメント、作品リストの順に掲載した。
- 作品リストの掲載順は展示会場、作品名(和英)、制作年、技法・素材、サイズとした。
- サイズ表記は縦×横(cm)もしくは高さ×幅×奥行き(cm)の順である。

作家コメント

作品リスト

小穴琴恵 <small>おあなことえ</small>	pp. 8–9
OANA Kotoe	

1990年	埼玉県生まれ 所沢在住
2015年	東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修了

近年の主な展覧会

2020年	「ところざわ アートの潮流」(所沢市民文化センター・ミュージズ、埼玉)
2021年	個展「For days of the have-nots」(RISE GALLERY、東京)
2022年	「第1回MIMOCA EYE/ ミモカアイ」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、香川)

主な受賞

2016年	「FACE 損保ジャパン日本興亜美術賞展」審査員特別賞
2019年	「シエル美術賞」入選
2022年	「第1回MIMOCA EYE/ ミモカアイ」入選

作家生活

幼い頃に所沢へ越してきた。幼少期・思春期を過ごしながら、大きくなったらどこか知らない土地で暮らすのだろうと思っていたが、今では新たに家とアトリエを構えてがっつり暮らしている。何度か家を出て別の地で暮らしたこともあったが、次に住む場所を決める時、その選択肢の中には常に所沢があった。それは生まれ育った土地というだけでは無く、制作に集中できそうな環境や生活を楽しめそうないくつもの魅力があったからだ。今ではそれに感謝しながら日々の制作と生活を楽しんでいます。

作家生活の場

たたずむ人 <i>A Standing Man</i>	
2023年	油彩、キャンバス
27.3×22 cm	

ファストフードのある食卓 <i>A Table with a Fast Food</i>	
2022年	油彩、キャンバス
91×72.7 cm	

シャワールームの風景 <i>A View in a Shower Room</i>	
2022年	油彩、キャンバス
100×80.3 cm	

西武鉄道 所沢駅	

作家生活の場

私の風景 <i>My Landscape</i>	
2022年	塩ビ版、アクリル、LEDライト
84×68 cm	

作家生活の場

菩提樹のある室内 <i>In the room with a Bo Tree</i>	
2022年	油彩、キャンバス
41×31.8 cm	

大きなテーブル <i>A Large Table</i>	
2022年	油彩、キャンバス
130.3×162 cm	

帽子の置かれたダイニングテーブル <i>Dining Table with a Hat</i>	
2022年	油彩、キャンバス
80.3×65.2 cm	

チリマツ <i>Chilean Pine</i>	
2022年	油彩、キャンバス
18×14 cm	

大野綾子 <small>おおのあやこ</small>	pp. 10–11
OHNO Ayako	

1983年	埼玉県生まれ 所沢にアトリエを構える
2006年	女子美術大学芸術学部立体アート学科卒業
2008年	東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了

作家生活

1983年 埼玉県生まれ 所沢にアトリエを構える
2006年 女子美術大学芸術学部立体アート学科卒業
2008年 東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了

作家生活

2019年	「タイムライン―時間に触れるためのいくつかの方法」(京都大学総合博物館、京都)
2020年	個展「ショーケースギャラリー 大野綾子展」(横浜市民ギャラリーあざみ野、神奈川)
2022年	個展「みどりは草の色カマキリの色」(CADAN有楽町、東京)

作家生活

作家生活

両親に連れられ航空公園に訪れた幼少期、バザーに群がる人の多さや、沢山の人が行き交う事からわかるその空間の広さに驚いた事を、今でも忘れない。大学卒業後、彫刻家として活動するために、作品を作る場所が必要だった。

縁あって再び訪れた所沢の印象は、相変わらず茶畑と林と草と、緑あふれる場所だった。

社会に出たばかりで、大きな不安と小さな期待をもっていた私は、その広々とした空気のおかげで肩の力が抜けた。

見上げるほどの草を狩広げ、作品を作り出す場所を整えることから始まった。

結婚して所沢に住んだ時期もあり、わりと気に入って暮らしていたが、家族の事情で今は別の街で暮らし、アトリエがある所沢まで日々通っている。

そして今では、2人の子ども達を所沢のアトリエや公園に連れてきて、騒がしくやっている。

作家生活

さかなのような人(マーメイド) <i>person like fish (mermaid)</i>	
2023年	深岩石、ステンレス、木
110×145×53 cm	

<div>加茂 昂</div> かもあきら	
<div>KAMO Akira</div>	
	
1982年　東京都生まれ　所沢在住	
2010年　東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修了	

近年の主な展覧会	
2019年　個展「境界線を吹き抜ける風」(LOKO GALLERY、東京)	
2020年　「ところざわ アートの潮流」(所沢市民文化センター・ミュージズ、埼玉)	
2021年　「3.11とアーティスト:10年目の想像」(水戸芸術館 現代美術ギャラリー、茨城)	
2022年　「世界の終わりと環境世界」(GYRE GALLERY、東京)	

子供が生まれてからすぐコロナ禍になり、新しい生活のリズムを作るのに必死でしたが、家籠りばかりで気持ちが落ち込む時、所沢の森にはずいぶんと助けられました。所沢の里山は決して大きな自然という訳ではないのですが、身近にあるその森はどこも綺麗で、少し足を踏み入れるだけでそこには子供が生まれてもコロナ禍になってもまったく変わらない自然を感じることができました。子供を連れてその木々の中を歩くことで、コロナ禍というバランスの傾いた社会の中で生きていく基本と生活のリズムを保てたように思います。

<p>——グランエミオ所沢2Fセントラルプラザイベントスペース</p>

トトロの森 <i>Totoro’s Forest</i>
2023年
油彩、キャンバス
112×162 cm

<p>——所沢駅東口市民ギャラリー</p>

福島県双葉郡富岡町夜ノ森付近にたずむ <i>Standing Near Yonomori Tomiokamachi, Futaba District, Fukushima Prefecture</i>
2022年
油彩、キャンバス
91×116 cm

桑名紗衣子 くわなさえこ	
<div>KUWANA Saeko</div>	
	
1982年　千葉県生まれ　所沢在住の後、東京都在住	
2008年　武蔵野美術大学大学院造形研究科彫刻コース修了	

近年の主な展覧会	
2020年　「ところざわ アートの潮流」(所沢市民文化センター・ミュージズ、埼玉)	
2021年　「でんちゅうストラット―つながる彫刻」(小平市平櫛田中彫刻美術館、東京)	
2022年　「インクルーシブ・サイト―陶表現の現在」(千葉市美術館、千葉)	

主なコミッションワーク	
2021年　東京都中央区桜川敬老館等複合施設(桜川保育園)エントランス	

私は8年間、所沢市に住まい兼アトリエを構えていました。縁もゆかりも無い土地でしたが、ここで出産、育児を経験し、子育てを通してここでのコミュニティの中で助けられてきました。息子が赤子の時から、四季を通して所沢の森を散歩しました。西武線を見る為だけに駅前にもよく行きました。息子が歩けるようになると、宝物のように捨ってくる葉っぱや、小石や、虫の死骸が、私には追体験として世界と再会するトリガーとなりました。この場所で、脈々と続く人の営みや、出会ったカタチ達は「懐かしくも初めて見る」「経験した事があるが違う視点だった」といった多層的な感覚や時間軸について考えさせてくれたように思います。次は、あの頃より成長した息子が、所沢の随所に散らばるカタチや関係と再会し、「懐かしいね」と語る姿を目撃するのがとても楽しみです。

<p>——所沢駅東口市民ギャラリー</p>

Summer Part-time Job <i>Summer Part-time Job</i>
2022年
ブロンズ鑄造(石膏原型共同制作者:箕輪亜希子)
27×25×24 cm

yyyy/mm/ddの散策#3 <i>Stroll of yyyy/mm/dd #3</i>
2022年
セラミック(某市内施設の型取り)、モルタル
サイズ可変

yyyy/mm/ddの散策#4 <i>Stroll of yyyy/mm/dd #4</i>
2022年
セラミック(某市内施設の型取り)、モルタル
サイズ可変

幸田千依 こうだちえ	
<div>KODA Chie</div>	
	
1983年　東京都生まれ　所沢在住	
2007年　多摩美術大学絵画学科油画専攻卒業	

近年の主な展覧会	
2020年　「ところざわ アートの潮流」(所沢市民文化センター・ミュージズ、埼玉)	
2021年　「River to River 川のほとりのアートフェス」(ya-gins、群馬)	
2022年　「公開制作84 幸田千依『空と競馬場』」(府中市美術館、東京)	
個展「ひとつの窓と11枚の絵」(LOKO GALLERY、東京)	

主な受賞	
2017年　「VOCA展2017」VOCA 賞	

所沢にアトリエ兼住居を構えて5年になります。出産したり、畑を始めたり、ここでの暮らしがすっかり今の自分に馴染んでいます。新しい絵も、生活の影響を受け生まれてきています。

<p>——グランエミオ所沢2Fセントラルプラザイベントスペース</p>

夕暮れの行き先2 <i>The Destination of Dusk 2</i>
2017年
油彩、アクリル、キャンバス
130.3×162 cm

Sabbatical Company サバティカルカンパニー	
	
pp. 18–19	

杉浦藍 すぎうらあい　SUGIURA Ai	
1982年　愛知県生まれ	
2007年　武蔵野美術大学大学院造形研究科彫刻コース修了	

益永梢子 ますながしょうこ　MASUNAGA Shoko	
1980年　大阪府生まれ　所沢在住	
2001年　成安造形短期大学造形芸術科卒業	

箕輪亜希子 みのわあきこ　MINOWA Akiko	
1980年　東京都生まれ	
2008年　武蔵野美術大学大学院造形研究科彫刻コース修了	

渡辺泰子 わたなべやすこ　WATANABE Yasuko	
1981年　千葉県生まれ	
2007年　武蔵野美術大学大学院造形研究科油画コース修了	

近年の主なプロジェクト	
2018年　「#08 Sabbatical Company “POTLUCK” party」(未来工房、東京)	
2019年　「#09 End of Summer」(ポートランド、アメリカ)	
2022年　「#10 OR We are still chatting.」(TALION GALLERY、東京)	

サバティカルカンパニーは4人のアーティストが集まって研究休暇の意味であるサバティカルな時間をテーマにプロジェクトを行なってきました。今回は、待ち合わせにも使用してきた所沢駅で、行き交う電車や人々の営みを想像しながら作品を作りました。「またね。」「またあとでね。」という言葉の背景の色は、所沢駅を通る特急から各駅停車までの色を使用しています。

<p>——西武鉄道 所沢駅</p>

またね。またあとでね。 <i>See You Later</i>
2022年
インスタレーション、映像、ポスター
映像(サイレント、カラー)／19秒(所沢駅中央改札、西武球場前駅改札)・映像(サイレント、カラー)／30秒(グランエミオ所沢、所沢駅構内)・ポスター / 59.4 cm×59.4 cm／18枚(所沢駅構内10箇所)

1980年 静岡県生まれ 所沢在住
2005年 武蔵野美術大学大学院造形研究科版画コース修了

近年の主な展覧会

- 2018年 個展 (YOSEIDO Gallery、東京)
- 2020年 「隣り合う片腕 The traced line」
(遊工房アートスペース、東京)
「ところざわ アートの潮流」
(所沢市民文化センター・ミュージズ、埼玉)
- 2022年 「The Adventure of Fine Art Prints」
(たましん美術館、東京)

所沢市に生活と制作の拠点を移してから12年になります。

湖から覗く富士を見て所沢に引っ越すことを決意しました。知らず知らずに故郷と似た風景と重ねていたのだと思います。

— 所沢駅東口市民ギャラリー —

tempo (#1, #2, #3, #5, #11, #12, #19, #20, #23, #24, #28, #41, #42, #51)
tempo (#1, #2, #3, #5, #11, #12, #19, #20, #23, #24, #28, #41, #42, #51)

2022年
銅版画、版画用紙
41×31.8cm、33.3×24.2cm、27.3×22cm、22.7×22.7cm、15.8×22.7cm、18×18cm

tempo (#4, #9, #10, #13, #15, #16, #21, #22, #27, #29, #30, #31, #39, #40, #52)
tempo (#4, #9, #10, #13, #15, #16, #21, #22, #27, #29, #30, #31, #39, #40, #52)

2022年
銅版画、版画用紙
41×31.8cm、33.3×24.2cm、27.3×22cm、22.7×22.7cm、15.8×22.7cm、18×18cm

The reflection in the lake #1
The reflection in the lake #1

2022年
銅版画、版画用紙
24.2×33.3cm (2点1組)

The sky over the hill #1
The sky over the hill #1

2022年
銅版画、版画用紙
22.7×15.8cm (2点1組)

1993年 福岡県生まれ 所沢在住の後、宮城県在住
2018年 武蔵野美術大学大学院造形研究科油絵コース修了

近年の主な展覧会

- 2020年 「ところざわ アートの潮流」
(所沢市民文化センター・ミュージズ、埼玉)
- 2021年 個展「CREAM」(アートギャラリー絵の具箱、東京)
- 2022年 個展「CAKES」(JINEN GALLERY、東京)

主な受賞

- 2017年 「三菱商事アート・ゲート・プログラム」入選
- 2018年 「ワンダーシード2018」入選

美大在学中に鷹の台から所沢に引っ越してきました。美大から近く都心へのアクセスもいいこと、アトリエとして使える部屋が見つかったことが決め手でした。実際とても住み良く、5年ほど暮らしました。自室で制作に明け暮れる傍ら、西武所沢の服屋で販売員の仕事をしました。隣駅の新所沢パルコの世界堂に通ったり、制作に煮詰まった時は航空公園を散歩しました。今は家族の事情で仙台で暮らしていますが、所沢は大好きな町です。

— 所沢駅東口市民ギャラリー —

strawberry short cake
strawberry short cake
2022年
アクリル、ジェルメディウム、モデリングペースト、パネル
45.5×53×3cm

strawberry cake
strawberry cake
2022年
アクリル、ジェルメディウム、モデリングペースト、パネル
33×24×3cm

raspberry tart
raspberry tart
2022年
アクリル、ジェルメディウム、モデリングペースト、パネル
72.5×60.5×5cm

blueberry danish
blueberry danish
2022年
アクリル、ジェルメディウム、モデリングペースト、パネル
38×45.5×3cm

ワークショップ

2023年1月28日(土)

「ダンス to ねんど」 11:00-12:00

作るってなんだろう? 紙粘土を使ったダンス体験から、偶然に生まれてくるかたちを楽しむ体験型ワークショップ。

講師: 桑名紗衣子 本展出品作家・彫刻家、うえもとしほ 振付家・パフォーマンス

「石を使ってモビール(動く彫刻)を作ろう」 14:00-16:00

石や紙など色々な材料を使って、“大切な人々や場所、風景”をテーマにモビール(動く彫刻)を作る造形ワークショップ。

講師: 大野綾子 本展出品作家・彫刻家



会場 グランエミオ所沢2Fセントラルプラザ

スタンプラリー

会期中に各施設を回遊するスタンプラリーを実施。全てのスタンプを集めた鑑賞者に、ところんオリジナルグッズ(数量限定)をプレゼントした。

設置場所:
- グランエミオ所沢2Fセントラルプラザイベントスペース
- 西武鉄道 所沢駅(南改札前)
- 所沢駅東口市民ギャラリー

景品交換場所:
所沢駅東口市民ギャラリー



現代美術展「ところざわ アートのミライ」
TOKOROZAWA: ARTS FOR OUR FUTURE
2023.1.14-1.29 9:00-19:00

参加作家：
小穴琴恵
大野綾子
加茂昂
桑名紗衣子
幸田千依
Sabbatical Company (杉浦藍、益永梢子、箕輪亜希子、渡辺泰子)
柰谷圭章
森田可子

会場：
グランエミオ所沢2Fセントラルプラザイベントスペース
西武鉄道 所沢駅
所沢駅東口市民ギャラリー

主催：
所沢市

協力：
グランエミオ所沢
西武鉄道株式会社
公益財団法人所沢市公共施設管理公社

企画協力：
森啓輔 千葉県美術館学芸員

『ところざわ アートのミライ』報告書

2023年3月

編集・発行：
所沢市文化芸術振興課
〒359-8501 所沢市並木一丁目1番地の1
TEL 04-2998-9211 (直通)
FAX 04-2998-9491
E-mail a9211@city.tokorozawa.lg.jp

編集協力：
森啓輔 千葉県美術館学芸員

デザイン：
熊谷篤史

撮影：
熊谷篤史 pp.3-11, 13-15, 18-23, 30, 31

写真提供：
加茂晟 p.12
幸田千依 pp.16-17
所沢市文化芸術振興課
p.30 ワークショップ「ダンス to ねんど」・「石を使ってモビール(動く彫刻)を作ろう」(下)
久保純子 市民カメラマン
p.30 ワークショップ「石を使ってモビール(動く彫刻)を作ろう」(上)



Sabbatical Company 〈またね。またあとでね。〉
Sabbatical Company See You Later
2022年



所沢市文化芸術振興課

〒359-8501 所沢市並木一丁目1番地の1

TEL 04-2998-9211(直通) FAX 04-2998-9491 E-mail a9211@city.tokorozawa.lg.jp